六波羅蜜　p219-15～p221-11　　小倉

黒字・本文　青字・辞書　赤字・私見など

精進を増長させる方便

精進を増長させるのは、智慧と智恵(はんにゃ)と廻向との三つにより、増長させるのです。上に〔「施しを増長させる方便」の個所に〕説明したようにです。

精進を清浄にすること

精進を清浄にするのは、空性と悲により支えられたことです。上に〔「施しを清浄にするもの」の個所に〕説いたようにです。

精進の果

精進の果は

1）究竟と、

2）当座の二つと知るべきです。

そのうち〔第一：〕究竟は無上の正覚を得るのです。そのようにまた『菩薩地』(訳註32)に「菩薩は、精進の波羅蜜を完成させるべきです。無上の正等覚に〔速やかに、過去に〕現等覚したし、〔未来に〕現等覚するでしょうし、〔現在〕現等覚するのです。」と説かれています。

〔第二：〕　当座の果は、輪廻に住しているときも、〔輪廻の生存・〕有の諸々の最上の安楽を得るのです。そのようにまた『荘厳経論』(訳註33)に「精進により〔輪廻の〕有において受用したいと欲するものを得る。」と説かれています。

〔以上が、〕『正法如意宝珠・解脱の宝の荘厳』より、「精進の波羅蜜」の第十五章です。

精進を増長させるのは、智慧と智恵(はんにゃ)と廻向との三つにより、増長させる、について智慧と智恵(はんにゃ)と般若の違いは何なのか？

ここで智慧について辞書を引いてみました。

智慧：一切の現象や現象の背後にある道理を見きわめる心作用。（中略）3通りの用例が見出される。第1には、原語 prajña の訳語として、〈智慧〉一語で、音写語の、（＊般若はんにゃ）と同等の意味合いで用いられる場合。第2には、〈智〉が原語 jñana の訳語、〈慧〉が prajña の訳語として、〈智〉と〈慧〉という二つを示す用語として用いられる場合、（中略）第1の意味では、＊無常・＊苦・＊無我、＊縁起、＊中道などの＊諸法の道理を洞察する強靭な認識の力を示し＊三学の一つとされた。（後略）

般若：［*s*: prajña,*p*:panna］サンスクリット語 prajña の俗語形（おそらくは panna）の音写.直観的・直証的な（智慧）をいう.般若は初期仏教以来,*無常・*苦・*無我などの*諸法の真理を見抜く智慧として,また*三学の一つとして重視された（後略）　　岩波仏教辞典第二版

智慧と般若は同義で直観智ということでしょうか
——三学:戒・定・慧
一方、智恵(はんにゃ)の方は、ここでは異なった文字で使い分けているので、文脈から「空性と悲に基づいた手段で有情を利益する力」としました。智恵(はんにゃ)には悲が含まれるのではないでしょうか。智恵(はんにゃ)をもって有情に関わるとき、煩悩により苦しむ有情に対して悲が生じて、智恵(はんにゃ)と呼ばれるのではないかと考えます。辞書の第2の方も興味深かったです。
精進を清浄にすること、については、施しの波羅蜜の章で学んだことと同様です。
本文の精進の果については、
1)の〈究竟〉の個所は——究極的には仏の悟りを得るのです。精進の波羅蜜を完成させるべきです。なぜなら過去にも菩薩は、仏の悟りをあるがままに見た(悟った)し、未来にも菩薩はそうであるし、現在(いま)も菩薩はそうである、すべての時に菩薩は精進することにより、仏の悟りを悟るからです。
　大乗の仏教徒は六波羅蜜を実践して、仏様が悟ったその悟りを悟るのではないでしょうか。
〈当座の果〉——については書かれている通りだと思います。

第１６章　静慮の波羅蜜

静慮の波羅蜜

静慮の波羅蜜(禅定の完成)について、摂義(ウッダーナ)は、「過失・功徳の二種類を思惟することと、〔自〕体と区別と、区別個々の自相(定義)と、増長と清浄にすることと果と〔——これら〕七つの義により、精進の波羅蜜は包摂されている。」というのです。

静慮を具えていないことの過失と具えていることの功徳

そのうち、第一を説明するなら、施しなど〔の波羅蜜〕を具えていても、静慮(禅定)を具えていないなら、彼は散動のなすがままになって、心が煩悩の牙により傷つけられることになるのです。そのようにまた『入行論』)(訳註1)に、「心が散動した人は煩悩の牙の間に住している。」と説かれています。
　また、静慮を具えていないなら、神通は生じないし、神通が生じていないなら、有情の利益をできないのです。そのようにまた『菩提道灯論』(訳註2)に「止住が成就していないので、神通は生じないのです。同じく神通力を欠いているので、有情を利益することはできません。」と説かれています。

　また、静慮を具えていないなら、智恵(はんにゃ)は生じないし、智恵(はんにゃ)が生じていないなら、正覚を得ないのです。そのようにまた『親友書簡』(訳註3)』に「〔智恵(はんにゃ)がなくては静慮は無い。〕静慮が無

くても智恵(はんにゃ)は無い。」と説かれています。

静慮:[s.dhyana]サンスクリット語の意味は,熟考すること,瞑想すること.音写して〈*禅〉〈禅那〉とも.〈*定〉〈禅定〉も同義.静かに真理を観察すること.心を散乱せず,一つのものに集中し,*智慧を得るための修行法.(後略)　岩波仏教辞典第二版

摂義(ウッダーナ)(uddana):ある内容の全体を要略した偈頌(げじゅ)。(中略)法身の十義を列挙した後に一つひとつを詳しく説明する「事前列挙」である。このように見てくると、ウッダーナは基本的に「事前列挙」の形式であると思われる。　インド学チベット学研究12号より抜粋

禅定:六波羅蜜の第五。心静かな内観。心の計らいを静めること。瞑想。(中略)静慮・思惟修に同じ。

止住:とどまり安住すること。

神通力(じんずうりき): ①超人的な力。②聖者の具備する六つの不思議な力、すなわち六神通のこと。六神通とは、天眼通・天耳通・他心通・宿住通・漏尽通・神境通　広説佛教語大辞典

(最初、静慮の章を読んだとき、こう考えたのですが…)心を一点に止めて鎮まった心で対象を明瞭に見る瞑想ということでしょうか。智慧を得るための瞑想で、六波羅蜜では最終的に勝義諦を知るのが目的。

ドルズィンリンポチェのご法話によりますと、

(ドルズィンリンポチェのご法話「六波羅蜜」2018. 3. 6－3. 7より引用させていただきます。)

静慮というものがなければ心が放逸になってしまうからです。そうすると善を行うことができません。外側ではなにか善い事をしていたとしても、内の心がゆれてどこかに行ってしまっていると、善を行うことができないわけです。ですから、静慮というものは非常に大切なわけです。布施を行うにも静慮がないと布施波羅蜜にはなりません。戒律を守る際にも禅定というものがなければ、戒波羅蜜になりません。ですから、仏教の行を行じるときには、静慮というのもがないと究極である波羅蜜には至らないわけです。ですのでこの静慮というものを実践していく、そしてこれが何かというのを分る必要があるわけですけども、これは何かといいますと、不放逸になるということです。それと反対の放逸、そしてそれにならない不放逸、ということですけども、放逸というのは体がここにありながら、心がどこかに行ってしまっている状態を放逸といっています、不放逸とは、身体もここにあり心もここにあり言葉もここにある、こういう状態のことを静慮といっているわけです。

ドルズィンリンポチェはまたこうもおっしゃっています。

瞑想を行うことによって妄分別を小さくすることが出来る、妄分別に交わらずにいられるようになるのです。心の苦しみである妄分別がなくなることが出来るので、どこの宗教であろうとも瞑想というものを行うことが必要なわけです。何か心に心配ごとがあるようなときに、本当にその心配事の原因となるものがある場合と、ない場合とがあります。

たとえ何もない場合であったとしても自分で心配事を作っていくわけです。例えばいい仕事があった場合だと、この仕事がなくなってしまったらどうしようとか、健康であるのにいつか病気になったらどうしようとか、友人がいるけどいつか関係が悪くなったらどうしようと、こういうふうに自分で自分の妄分別によって新たに心配事というものを作り出しているわけです。（中略）心が喜ばない苦しみをどちらも味わっているわけです。それを断ち切るために「止」というもの、もしくは「静慮」というものを瞑想していくんですけども、その際、心をそのままにおいて何も思うところなくおくと、そうすることによって心の苦しみというものが、自分の心で作り出している苦しみもなくなりますし、本当になにか苦しみがある場合でも、その時瞑想している時にはその苦しみもなくなるわけです。ですので、その「止」というものを瞑想しなさい。瞑想する必要がある、というふうに言われるわけです。

また、「止」とは心の中に妄分別がない状態。「静慮」は煩悩と交わらない。名前は違うけれども内容は同じです、とおっしゃっています。

瞑想していく上で、ドルズィンリンポチェにお話が聞けてとても良かったと思います。

――下記参考まで

・天眼通（てんげんつう）：超自然的な眼。死後の世界を見通すこと。すなわち天界と地獄とを見ること。人の素質から未来の運命を予測する智慧のこともさす。六神通の一つ。

・天耳通（てんにつう）：六神通の一つ。自在に一切の言語・音声を聞くことのできる通力。これに二種類ある。四禅を修して得た定力によって、天界の四大を発得し、天耳の作用をする修得と四禅天に生まれた果報として得た報得とである。

・他心通（たしんつう）：他人の心のありさまを知ること。相手の気持ちを察して、どのような考えや心情をもっているのかを見抜く力。六神通の一つ。知他心通・他心智通ともいう。

・宿住通（しゅくじゅうつう）：自他の身の過去世における生死の相を知る智慧
過去世における住処。②過去の生涯のこと。前世。過去世における自分の生存のありさま。

・濾尽（盡）通（ろじんずう）：生存の尽きてなくなることを確認すること。煩悩のけがれのなくなったことを知る智。六通のひとつ。濾盡智證通（ろじんちしょうつう）に同じ。

・神境通（じんきょうつう）：空を飛行し。身を隠すなどの超人的な能力。神境智證通に同じ。

広説佛教語大辞典

神通とは何か。この世で比丘は、様々な神通の対象を経験する。すなわち、一となって多となり、多となって一となり、顕現と隠没とを智見によって知覚する。城壁を障げなく、岩や壁を障げなく行く。あたかも虚空におけると同様にである。地面に於いても〔浮き〕沈みする。あたかも水上におけると同様にである。水上をも沈まずに行く。あたかも地上におけると同様にである。虚空をも胡坐を組んで行く。あたかも翼ある鳥の如くにである。あのように威光無倫の日月を手でさすり、なでまわし、梵天界に至るまでを身体で支配する。〔これが神通である。〕

倶舎論註ウパーイカ―の研究　訳註篇　下　本庄良文著　より引用

「通とは善なる慧である」同本文より

静慮を具えていないことの過失と具えていることの功徳――について、神通が生じていないとどうして有情を利益できないのか？それは心が彷徨っていては「状況を正確に見ることができないから」でしょうか。状況は刻々と変化していきます。そんな時間の流れのなかで、今の瞬間に心がとどまることができたら、正確に状況に応じることができるのではないでしょうか。有情を利益するというのが、適切な時に適切な手段で有情のために行為する、と捉えるなら状況を瞬時に、正確に把握することが必要になると思うのですが、瞑想を続けることによって、それは可能になるのでしょう。それは物事をありのままに見るということでもあります。これは超人間的ですね！

また、静慮を具えていないなら、智恵(はんにゃ)は生じないし、智恵(はんにゃ)が生じていないなら、正覚を得ないのです。――因がなければ果は生じないです。

それとは逆に、静慮を具えているなら、劣った事物へのこだわりを棄てるし、神通が生ずるし、多くの等持（三昧）の門が〔心〕相続に生ずるのです。そのようにまた『聖摂』(訳註4)に「静慮により、叱責される妙欲〔の境〕を捨てて、明知※と神通と等持（三昧）すべてが現成する。」と説かれています。

また静慮を具えているなら、それにより智恵(はんにゃ)を生じさせて、自己の煩悩すべてを破壊するのです。そのようにまた『入行論』(訳註5)に「止住とよく相応した勝観により、煩悩を摧破すると知ってから〔、最初に止住を求めるべきです〕。」と説かれています。

等持：心を一つの対象に住せしめて平等に継続し、たもつこと。心を集中すること。三昧に同じ。

門　：②道理。見方。見地。方法。

妙欲：五感の欲望

現成：完全に実現すること。　　広説　佛教語大辞典

また静慮を具えているなら――煩悩により生起する物事へのこだわりを棄てるし、神通が生じるし、等持を成すための多くの方法が心相続に生じる。静慮により煩悩である五感の欲望を棄て、明知と神通と等持が完全に実現する。と説かれています。

『入行論』(訳註5)に「止住とよく相応した勝観により、煩悩を摧破すると知ってから――止と

それに対応した観（洞察）の瞑想をすることで、心が不放逸な状態になり、そこで煩悩を見ることにより煩悩を破壊すると知って、まず「止」を行うべきです。

また、静慮を具えているなら、真実の義が見えるし、有情に対する悲（あわれみ）が生ずるのです。

そのように『法集経』(訳註5)に「意（こころ）を等至〔に入定〕させたことにより、真実が如実に見えることになる。真実が如実に見えることにより、菩薩は諸々の有情に対する大悲に入る。」と説かれています。

また、静慮を具えているなら、教化対象者すべてを正覚に立たせることができるのです。そのようにまた『荘厳経論』(訳註7)に「静慮そのものによってもまた、〔三乗の種姓の〕すべての者たちを三つの正覚に立たせる。」と説かれています。

義　:①事がら、対象、もの、自体、実体

等至:心身の平等で安らかな状態。散心から定心に至った段階。

三乗:声聞乗、縁覚乗、菩薩乗という三つの実践のしかた。それぞれの人を能力、素質に応じてさとりに導いていく教えを乗り物にたとえたもので、声聞、縁覚、菩薩の三者の能力に応じた教えをいう。（中略）声聞、縁覚、菩薩に固有な三種のさとりにおもむかせる立場があるのをいう。

広説佛教語大辞典

また静慮を具えているなら、事実がありのままに見えるし、有情に対する悲（あわれみ）が生ずる。「意（こころ）を放逸から不放逸に至らせたことにより、真実が如実に見えることにより、菩薩は諸々の有情に対する大悲に入る。」これは有情が苦しんでいるという真実があり、意の不放逸によってその状態がありのままに見える、ということですが、意が放逸していると有情の苦しみは見えず、悲が生じないということでしょうか。

また静慮を具えているなら、教化対象者すべてを正覚に立たせることができるという箇所を読んで、なにか根拠があるのだろうか？と考えてしまいましたが、お釈迦様はどのような人にも対機説法により、その人にとっての最上の気づきを起こさせたことを思うと、そうなのかもしれません。

「〔三乗の種姓の〕すべての者たちを三つの正覚に立たせる」とは声聞乗・縁覚乗・菩薩乗のすべての修行者を、それぞれに固有の三種のさとり（の智慧）を得る場に立たせると説いているのでしょうか。

静慮の〔自〕体

静慮の〔自〕体は、止住の自性――心が内に善に対して〔専注した〕一境性に安住することです。

そのようにまた『菩薩地』〔の「静慮品」〕の静慮の自性を説いた個所(訳註8)に、「〔世間と出世間の〕心一境性の、善に心が安住すること。」と説かれています。

静慮とは、放逸にならず善という対象に心を止めて、煩悩におかされず安住することと説かれています。

以上です。